

『帰還せざる旅』論序説

大 貫 徹

Since Europeans discovered the New World, a lot of travelers' tales have been written. The key theme of the travels is the encounter between Europeans and non-European others. However, in reality, these should be considered only mock encounters. According to E. Said, the non-European other, of which "the noble savage" myth is very typical, is only a European invention. The actual world is not filled with friendly natives like "Friday" in the Robinson Crusoe story. The world is filled with hostile natives. There is misunderstanding and violence everywhere. Accordingly, the journey that we should think about today is not a harmonious one like Robinson Crusoe's experience. Rather, it will be a journey of "no return" such as Kurtz's experience. This essay attempts to make known another encounter between Europeans and non-European others through a post-colonial interpretation of *Heart of Darkness* (1899) by Joseph Conrad.

第1章 帰還せざる旅

H. G. ウェルズ Herbert George WELLS (1866-1946) に『タイム・マシン』*The Time Machine*⁽¹⁾ (1895年) という物語がある。この最後で、語り手「私」は、再び旅に出た「時間旅行家」がいつまで待っても戻ってこないと嘆きながら、以下のように語る。

それで事の次第がのみこめた。私は(略)「時間旅行家」の帰りを待つことにした。前回より、おそらくずっと珍しい体験談が聞けそうだ。それに標

本類や写真も持ってくるのではないか。しかしこのようすでは一生涯待つことになるかもしれない。「時間旅行家」が姿を消して3年になる。そして、皆が知っているように、未だに彼は還らないのである。(75頁)

こう語った後で、語り手「私」はその理由について以下のように言う。

戸惑うばかりだ。彼が戻ってくるようなことがあるのだろうか。彼は大昔に逆戻りして、旧石器時代の血に飢えた毛むくじゃらの野蛮人に捕まってしまったのだろうか。それとも、白亜紀の深海の底か、ジュラ紀のグロテスクな蜥蜴や巨大な爬虫類の中へ飛びこんでしまったのだろうか。今も「今も」という言葉を使えとすればだが―彼は長頸竜の生息する魚卵状岩の珊瑚礁の上や、三疊紀のもの寂しい塩湖のほとりを彷徨っているのかもしれない。(75頁)

語り手は「時間旅行家」が帰還しないことに戸惑い、何らかの事故にあったのではないかと想像する。つまり、「時間旅行家」は帰還する気があるにもかかわらず、事情でそれができない状況にあると考えているのだ。しかしそうだろうか。そもそも「時間旅行家」自身がすでに帰還する気を失っていると考えることもできるのではないだろうか。もちろん、実際のところは分からない。語り手が言うように「毛むくじゃらの野蛮人に捕まってしまった」と想像することもできるだろうし、あるいは未知の世界の探検に夢中で時間をまったく忘れていると考えることもできるだろう。しかし論者には「時間旅行家」が帰還する気をすっかり失ってしまったという気がしてならない。というのも、「時間旅行家」は、物理的な意味でも精神的な意味でも、あまりにも遠く行き過ぎてしまったと思われるからだ。以下の引用は「時間旅行家」が旅の最後に遭遇した「地球の終焉」の場面である。

暗黒が急速に広がって行った。(略) 海岸にひたひたと打ち寄せる波の音だけが辺りに聞こえていた。こうした音を除けば世界は静寂だった。静寂? いや静寂という言葉でもあの静けさを想像してもらうのは難しい。人間の声、羊の鳴き声、小鳥のさえずり、虫の音、そういった、僕らの生活を織りなしているいろいろなものは一切聞こえなかった。(略) 次の瞬間、見えるものは青白い光を放ついくつかの星だけだった。それ以外は闇が万物を覆い尽くし、空さえも漆黒の暗闇と化した。(略) 気分が悪く、困惑しているとき、再び赤い海が寄せてくる砂州の上を何か動いている物が見えた。それはたし

かに何か動く物体であった。丸いフットボール、いやそれよりも少し大きめな物体で、いく本もの触角が上から垂れ下がっていた。うねる、赤い海を背景に黒く見えるその物体は、気まぐれにビョンビョンと跳びはねていた。僕は今にも気を失いそうだった。しかし、あの遠い未来の、恐ろしい薄明の世界にたったひとりであることの恐怖を思い、何とか気力を振り絞って、タイム・マシンによじ登った。(70-71頁)

このときは「時間旅行家」は気丈にも「気力を振り絞って」脱出する。しかし「地球の終焉」に立ち会った人間が、あたかも何事もなかったかのように、再び安楽のロンドン社交生活を送れるであろうか。考えるまでもない。「時間旅行家」はあまりにも遠く行き過ぎてしまい、そのため決定的な変容をこうむってしまったのだ。もとよりこれは推測である。しかし論者はある意味で確信に近いものを感じている。というのも、「時間旅行家」の物語をもう少し広い文脈で考えてみた際、いくつか似た物語があることに気づくからである。まず思い浮かべる物語は、ジョナサン・スウィフト Jonathan Swift の『ガリヴァー旅行記』 *Gulliver's Travels* (1726年)⁽²⁾ である。『タイム・マシン』以上に名高い、この物語において、主人公であるガリヴァーは、矮人国であるリリパット、さらには巨人国のプロブディンナグ、そして空飛ぶ島であるラピュタ等への渡航を経て、四度目にフウイヌムの国に辿り着く。結果的にはこれがガリヴァーの最後の旅となるのであるが、この国に漂着したガリヴァーは、そこで、あらゆる点で対立している二種類の生物「フウイヌム」と「ヤファー」⁽³⁾ に遭遇する。やがてガリヴァーは「理性(=形而上的)そのもののフウイヌム」と「非理性(=形而下的)そのもののヤファー」の狭間にあって次第に自己のあるべき位置を見失ってしまい、そのあげく、二度と普通の生活に戻れなくなってしまう。以下は帰国直後の様子を描いたものである。

家へ入るやいなや、妻は我輩を両腕に抱いて接吻した。だがなにしろこの数年間というものは、この忌まわしい動物に触れられたことなどほとんどなかったものだから、たちまち一時間ばかりも気を失ってぶっ倒れてしまった。(略) はじめの一年間は妻子と一緒にいるだけでもたまらなかつた一臭いがだいいち我慢できないのである—ましてひとつの部屋で食事を共にするなどはもってのほかだった。今日でさえ、なおパンに手を触れさせることやひとつ容器から物を飲むことなどは断じてさせはしないし、彼らに手をとっても

らうなどということもむろんない。(339頁)

ガリヴァーに残されたわずかな慰めとは二匹の仔馬のいる馬小屋に閉じこもり毎日少なくとも四時間は彼らと対話を交わすことでしかない。馬丁が馬小屋から持ち帰る臭気だけが彼の精神にかすかな蘇りを感じさせるといった状態が続くのである。まさに悲惨な最期としか言いようがない。出発前とはまったくの別人となってガリヴァーは帰国したのである。この点に関して、スウィフト研究家でもある四方田犬彦は以下のように述べている。

ガリヴァーを無理矢理に船内へと保護したポルトガル人たちは、「皮の上衣、木靴、毛皮の靴下といった〔ガリヴァー〕の奇怪にして異様な服装に、しばらく驚嘆」する。彼らは文字通り「馬の嘶きに似た、〔ガリヴァー〕の不思議な話しぶりに笑いこける。」(略)逆にガリヴァーは、フウイヌムの視座を借りることではか、この善良なるヨーロッパの船員たちを眺めることができない。船員の会話は、その耳には「不自然」であり、「まるでイギリスで犬や牛が喋りだしたり、フウイヌム国でヤファーが口を利き出すのに似た、奇怪な事態」に思えてくる。そのためガリヴァーは船から脱出しようと抵抗し、その試みに挫折するや、頑として黙秘を続け、一日中船内の自室に閉じこもってしまう。われらの主人公は、彼を育んだ文明とヒューマンティの世界への円滑な帰還がかなわないばかりでない。不幸にも、心身双方に決定的な変容を来してしまったのである。⁽⁴⁾

四方田ははっきりとここで「〔ガリヴァーは〕心身双方に決定的な変容を来してしまった」と記している。その意味で、「時間旅行家」は、賢明にも、ガリヴァーのような悲惨な状況を避けるため、文字通り「帰還せざる存在」となったとも言えるのではないだろうか。事実、世界の終焉を見てきた人間が再び19世紀末のロンドンで安穩に暮らすことなどできようか。ガリヴァーが狂気に襲われたというならば、「時間旅行家」もまた同じ狂気に襲われたのである。

第2章 帰還する旅、帰還せざる旅

このように考えると、旅には二種類あることが分かる。それは「帰還する旅」と「帰還せざる旅」である。もちろん、ふつうは帰還する旅である。そ

の典型がロビンソン・クルーソー Robinson Crusoeであろう。ダニエル・デフォー Daniel Defoe が1719年に刊行した『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』⁽⁵⁾と題された物語の主人公であるロビンソン・クルーソーは、今さら言うまでもなく、無人の孤島に漂流するや、合理的な行動と敬神の念を武器に、独り営々として生活を切り開いてゆく人物⁽⁶⁾であって、まさに勃興しようとする西欧資本主義にふさわしい存在である。したがって35年ぶりに故国イギリスに帰国してもロビンソンは何ら違和感を覚えない。ロビンソンにあっては、おそらく、無人の孤島での困難と、たとえば故国であるイギリス・ヨークシャーで味わう（かもしれない）困難とは質的に違いはないのだ。だからこそ、彼は無人島での困難をあたかもイギリスにいる場合と同様の勇気と知恵さらには神の恩寵で乗り越えようとし、実際、乗り越えてきたのである。このことは、ロビンソンが無人島に漂着した直後の行動にすでに明らかである。

これはいかにも悲惨なことに思われて、私は気が違ったように、その辺を当てもなく駆け廻った。そのうちに夜が来て、猛獣が餌食を探しに出てくるのは夜であるから、もしこの土地にそういう猛獣が住んでいるならば、どうしようかと思った。(略)私の傍らに縦のようで葉がよく茂った、ただし棘がある木が生えていて、それに登って夜を過ごす他にいい思案は浮かばなかった。私がどのような具合に死ぬことになるかは翌日考えることにした。その時はまだそこで生きて行ける見込みは全然立たなかった。(略)ひどく疲れていたもので、そのような場合にどういできるとは思えないほどよく眠った。私は翌日実心地よく目を覚ました。(略)ただし、じっと腕をこまねいて、ないものねだりをして仕方がないので、私は何とかしてこの困難を切り抜けようと思い立った。(36-37頁)

この一節にはたしかに「気が違ったように」という言葉はあるが、しかし次の瞬間ロビンソンは新しい試みに挑戦する。まさに彼自身が言うように、「何とかしてこの困難を切り抜けよう」という心持ちで困難を解決して行くのである。ここには精神的なショックを感じている暇もないほど忙しく知恵と勇気を振り絞って生きている人間がいる。ロビンソンには異国にいるという感覚が最初から欠如している。

そもそも西洋文学はホメロスの昔から帰還する男の物語を陸続と紡ぎ出してきた。オデュッセウスの帰還から始まって、近代ではハーマン・メルヴィ

ルの『モビー・ディック』(1851年)やジュール・ヴェルヌの『地底旅行』(1864年)および『80日間世界一周旅行』(1873年)さらにはライダー・ハガートの『ソロモン王の洞窟』(1885年)および『洞窟の女王』(1886年)そしてコナン・ドイルの『失われた世界』(1912年)などなど。およそ物語の主人公はさまざまな理由から安穏な日常の世界を離れ、未知の世界へと旅発つ。そこで主人公は日常では味わえないような驚異と恐怖の世界を次々と体験する。しかし主人公はこれを(ロビンソン・クルーソーと同様)勇気と知恵とで乗り越えて行く。その結果、主人公は、隠された財宝、未知の世界発見等々、出発当時の目的を果たした後、より高次の英雄となって意気揚々と故国に帰還する。主人公は旅の途上でいくつかの「死と再生」を繰り返すことでより大きな自己を獲得するというわけである。しかしながらこれは、ある意味では、同じ地点への帰還という構造であろう。

これに対し、「時間旅行家」やガリヴァーの帰還は同じ地点への帰還とは言い難い。むしろ途方もなく逸脱した地点への帰還としか言いようがない。それは言いかえれば「狂気に犯された」存在の帰還と言うべきかもしれない。このガリヴァーと比較した場合、ロビンソンはある限定された世界の中で漂流していたとしか言いようがないのではないだろうか。あるいはあの「時間旅行家」と比較した場合、リーデンブロック教授(『地底旅行』)やチャレンジャー教授(『失われた世界』)は所詮暢気な旅に終始していたとしか言いようがないのではなからうか。

ヨーロッパによる新大陸発見以来、多くの旅行記が書かれてきた。そこで展開されている大きなテーマは言うまでもなく「他者との遭遇」や「世界の果て」である。しかし実際にはそうしたテーマに肉薄しているのはきわめて少ないのではないだろうか。19世紀末にピークを迎える西洋帝国主義＝植民地主義、たしかにそこではアフリカやアジアを舞台として「他者との遭遇」がいろいろな次元で行われてきた。しかしロビンソン・クルーソーに典型なように、「他者」とは言いながら、ある限定した形での、いわば括弧付きの他者との遭遇しか結局は演じていなかったのではないだろうか。「良き野蛮人 (le bon sauvage)」という表現⁽⁷⁾に見事に表われているように、これまでは「他者」が持つ本来の恐怖が描かれてこなかったのではないか。あるいは「世界の果て」の向こうに行ってしまう、あらゆる共同体の「外部」に出たために、ついに帰還不能となることへの恐怖がきちんと描かれてこなかつ

たのではないか。しかし今日考えるべき旅とはむしろ（ガリヴァーのような、あるいは「時間旅行家」のような）帰還不能の旅なのではないだろうか。というのも、帰還不能の旅こそが、世界の現実を如実に表わしていると思うからである。実際、世界は透明なコミュニケーションに包まれた平和な存在に満ちているばかりではない。むしろ至るところにディスコミュニケーションがあり、暴力がある。こうした状況を考えるならば、ロビンソン・クルーソーのような調和型の円環的旅ではなく、ガリヴァーの経験したような、行き切りの帰還不能な旅こそが今日的な移動の原型であることは明らかであろう。その意味ではジョウゼフ・コンラッド Joseph Conrad の『闇の奥』*Heart of Darkness* (1899年)⁽⁸⁾ はきわめて重要である。というのも、ここには「帰還する旅」と「帰還せざる旅」という二種類の旅が重層的に語られているからだ。言うまでもなく、帰還する旅とはマーロウ Marlow の旅であり、帰還せざる旅とはクルツ Kurtz の旅である。

第3章 『闇の奥』における重層する旅

アフリカ奥地に赴くマーロウの旅はこれまで数多く書かれてきた冒険旅行記と同じ構図の中にある。ある意味では、リーデンブロック教授やチャレンジャー教授と同様、アフリカの奥地という未知なる未開の土地で、珍奇な風習や奇妙な存在と遭遇し、あるいは生死の境をさまようような危険な事態と向き合いながら、主人公であるマーロウがようやく帰還するという冒険旅行記が書かれてもおかしくはないはずであった。しかしそうはならなかった。それは未知なる土地で遭遇するのが（本来出会うべき）黒い肌の原住民ではなく、「いわばヨーロッパ全体が集まって作り上げている」（50頁）と言われている西欧白人男性クルツだったからである。「アフリカの奥地で白人男性と出会う！」しかしこれだけだったら、それはたとえば探検家ヘンリー・スタンリー Henry Stanley がアフリカ中央部の奥地で数年前に行方不明となった伝道者D. リヴィングストン Livingstone を1871年11月に発見した⁽⁹⁾と同様な事態であって、感動的な出会いとはなっても、今回のような深刻な事態とはならないはずだ。実際、クルツは、伝道者であるリヴィングストンと同様、アフリカ奥地に文明の光を灯すという高邁な理想を掲げながらこの地にやってきた⁽¹⁰⁾。にもかかわらず、リヴィングストンとは異なり、クルツが

野蛮そのものへと変貌してしまった、ここにマーロウの大きな戸惑いがあるのだ。彼は、自分が遭遇したのがいわゆる黒い肌の野蛮人なのかそれとも白い肌の理性ある西欧人なのか、いずれとも言い難い状態のまま宙づりとなってしまう。クルツがどうしてそのようなことになったのかマーロウには分からない。クルツがカニバル的行為もしていることや原住民の女と「結婚」もしていること、さらには原住民たちから神のように崇められていることなどもやがて判明する。これに加えて、クルツがもはや西欧に帰還する気もすっかり失せてしまったことも判明する。⁽⁴¹⁾ もちろんマーロウは事態がよく飲み込めない。というのも、マーロウはクルツがどうして帰還する気がなくなってしまったか、それがまったく分からないからだ。しかしながらマーロウは、その任務に忠実に、自分が船長を務める蒸気船にクルツを無理矢理乗せ、そのまま帰国させようとする。しかしすでに重い病に犯されていたクルツはほどなく船上で死んでしまう。その際、彼が最期にマーロウに向かって口にする言葉があの名高い「The horror! The horror!」（68頁）という言葉である。

そのような言葉を口にせねばならないクルツはいったい何を見て、何を体験したのか、この点になると何も書かれていない。しかし二度と故国に帰還できない存在へと変貌したクルツ⁽⁴²⁾を前にして、マーロウはただひたすら怯えるしかない。その結果、帰還したマーロウはクルツの許婚者に向かって、この「あまりに暗すぎる」（76頁）臨終の言葉を伝えるかわりに、「クルツが最期に口にしたのは一やはり、あなたのお名前でした」（75頁）と言うのである。こうすることで、マーロウは、クルツの許婚者が体現している、そしてかつてはクルツ自身もその住人であった理想主義的世界（アフリカ奥地に文明の光を灯すという高邁な理想を抱き続けている世界）⁽⁴³⁾を持続するために、クルツのアフリカ体験を決定的なところで書き換えてしまうのである。実際、このとき、（マーロウによって婚約者に提示された）クルツはあたかもスタンリーがアフリカの奥地で発見したリヴィングストンその人のようである。しかし現実にはその逆である。クルツは何者とも言えないような怪物へと変貌してしまっていたのである。「時間旅行家」が地球の終焉場面で遭遇したような、奇妙な存在へと変貌してしまっていたのである。いったんはそこから逃げ帰ってきた「時間旅行家」は二度と日常生活に戻れなかった。しかしマーロウは、帰還不能な存在と化してしまったクルツの物語をその決

定的なところで書き換えてしまうことで、なんとか西欧社会への復帰を果たそうとしたのである。

「西欧に帰還する」とは実はこのことである。非西欧世界で見てきたものを忘れること、決定的な変容が生まれようとするその瞬間にそこから必死になって逃げることに、これが「帰還する」ことの必須条件である。「時間旅行家」やガリヴァーはあまりにも遠くに行きすぎ、あまりに多くのものを見過ぎてしまったために、決定的な変容を被り、二度と帰還できなくなってしまったのである。基本的にはクルツも同様だったはずである。それが「The horror! The horror!」という臨終の言葉に集約されているのだ。

しかしながら決定的な瞬間にマーロウはこちら側に遁走し、クルツは遁走する間もなく向こう側へ足を踏み入れてしまい二度と帰還できなくなってしまった。それではこの二人を別つものはいったい何だろうか。もちろん容易に明らかにできるものではない。ただ、ロビンソンやガリヴァーの場合とは異なり、「西欧」と「非西欧」あるいは「自己」と「他者」、そうしたものを別つ境界線がきわめて曖昧となってきたことがここでは重要ではないだろうか。ロビンソンは、いわば「他者」のいない世界にいた。それに対し、ガリヴァーは至るところに「他者」がいる世界の中を彷徨していた。これに対し、クルツやマーロウが生きている19世紀末の世界は、「西欧」と「非西欧」あるいは「自己」と「他者」、これらが裏表一体的に存在しているような世界と言えるのではないだろうか。あたかも通底しているかのように、それらはきわめて隣接しているのだ。だからこそ、マーロウは自分のアフリカ体験記を古代ローマ帝国時代のテムズ川からまず説き起こすのである。

「ここもねえ」と突然マーロウが言い出した。「かつては地上の暗黒地帯のひとつだったのだ。(略) 僕は昔、そう1900年も昔、ローマ人が初めてここへ渡って来た頃のことを考えているのだ—と言っても、つい昨日のようなのだが、その時以来、この河から光明が流れ込んだのだ。」(9頁)

マーロウは、19世紀西欧文明の中心であるロンドンがあたかも未開そのもののアフリカ中央部と通底し合っているかのように語っている。実際、マーロウはアフリカ奥地において、その原住民が自分たちと通底し合っていることに気づき、大いに驚愕する。⁽⁴⁾ それは「人類普遍」という形で昇華するような通底ではない。それは逆に西欧文明人の奥底に不意に非西欧的な野蛮

そのものを見出すような通底なのである。まさに「[マーロウ]は、ヨーロッパ人のなかにアフリカ人的な野蛮な資質を発見することによって、あるいは逆に、アフリカ人のなかにヨーロッパ人的な資質が生来的にそなわっていることを発見することによって、彼がいままで抱いていた進化論的人種差別主義が崩壊するのを感覚するのである。そして人種差別主義の崩壊とともに、帝国主義を正当化していた[観念]が、たんに啓蒙主義的「進歩」の理念のみならず社会ダーウィニズム的「進化」の理念までも、彼の内部でしだいに崩壊していくことになる」⁽⁴⁵⁾と丹治愛が主張する「崩壊」の感覚⁽⁴⁶⁾そのものなのである。

西欧の世界進出がその極限にまで到達した瞬間、それはまさに19世紀の西欧植民地主義が最盛期を迎えた瞬間だったのだが、そのピークの瞬間にくると反転するかのように、それまであった「西欧」と「非西欧」との境目が崩壊し、逆に「西欧」の中に「非西欧」が出現してしまったのである。あるいは「自己」の中に「他者」が出現してしまったのである。このとき、不意に開いた野性的世界の中に真っ逆さまに墜落してしまったのがクルツである。これに対し、そういう落とし穴の中に墜落する瞬間、必死に逃げたのがマーロウであろう。この咄嗟の判断がクルツとマーロウを別けたのではないか。しかしこのマーロウといえども、「意識」の中に「無意識」が潜んでいることを見つけたフロイト⁽⁴⁷⁾の同時代人としては、いつクルツのように向こう側に墜落してしまうか分からないのは言うまでもない。

第4章 『闇の奥』以降の越境小説の行方

コンラッドの描いた『闇の奥』は、クルツとマーロウという二人の白人男性を描き分けることで「帰還せざる旅とは何か」を見事に明らかにした。その結果、この作品を契機に20世紀は「帰還せざる旅」が陸続と描かれることになる。その典型がポール・ボウルズ Paul Bowles (1910-1999) の作品である。その名高い長編小説『シェリタリング・スカイ』*The Sheltering Sky* (1949年)をはじめとして、ボウルズは繰り返し「帰還の困難」をテーマにしている。⁽⁴⁸⁾『シェリタリング・スカイ』のヒロインであるアメリカ人女性キットKitは、最後には、いかなる共同体にも帰属しないままサハラ砂漠の向こうを永遠に彷徨することになる。キットにとってのサハラ砂漠とは、

ロビンソンが漂流した無人島でもなければ、ガリヴァーが最後に辿り着いたフウイヌム国でもない。それはまさに、クルツやマーロウが彷徨したアフリカ奥地と同様、「自己＝西欧」が「他者＝非西欧」へと転じ、「他者＝非西欧」が「自己＝西欧」へと戻ってくるような、きわめて捻れた世界である。しかしながらこのとき、キットは、あの「美しすぎる世界 (too beautiful world)」には二度と帰還できなくなってしまったことだけはたしかである。

ボウルズはこの点に関して、必ずしも私たちの論点にそのままそっくり重なっているわけではないが、きわめて近い観点から以下のように述べている。

ポート Port (『シェリタリング・スカイ』のもうひとりの主人公で、キットの夫) の説明によると、[観光客 tourist と旅行者 traveler] はひとつには時間の点で相違している。観光客というものはおおむね数週間ないし数ヶ月の後は帰還するのに対して、旅行者はいずれの土地にも属しないまま、何年もの期間をかけて、地球上のある部分から他のある部分へと、ゆっくりと移動して行く。⁽¹⁹⁾

この引用にある「観光客 tourist と旅行者 traveler」という区分が生じたのも、移動手段等が発達した19世紀半ば以降というきわめて限定的な話であろうが、しかしここで、ボウルズがポートの口を通して「いずれの土地にも属しないまま、ゆっくりと移動して行く旅行者」という概念を明確にしたことの意味は大きい。こちら側にも向こう側にも行かず、ただひたすら横滑りをするだけの存在とはまさに、私たちの言葉で言えば「『自己＝西欧』が『他者＝非西欧』へと転じ、『他者＝非西欧』が『自己＝西欧』へと戻ってくるような、きわめて捻れた世界」の中を彷徨するクルツやマーロウのような存在なのである。もちろん「ただひたすら横滑りをするだけの存在」と言うには、クルツやマーロウはこちら側にもあちら側にも少々傾きすぎている。しかしそれは時代の違いということかもしれない。というのも、19世紀末の彼らが20世紀も半ばになるとこちら側にもあちら側にも墜落せずにただひたすら横滑りする存在へと変貌する可能性があると思われるからだ。そのときクルツやマーロウがキットその人になるのである。

ボウルズが明らかにしたように、旅には明らかに異なる二つの旅がある。この違いは単なる旅の違いというのではない。この違いは、私たちがこれまで漫然と考えてきた「自己」や「他者」あるいは「異文化体験」という問題

設定をもう一度根底から考え直す契機となるようなものなのである。その意味で、『闇の奥』の舞台は明らかにアフリカ奥地⁽²⁰⁾にも関わらず、いつも「内なる異郷への旅」⁽²¹⁾ というようなきわめて象徴的な旅として解釈され続けてきたのは、ひとつにはそこにアチェベが言うような意味での西欧人の差別的な視線が根強くある⁽²²⁾からだとともに、しかしそれだけではない。それはこの物語がそれまでの異文化体験記とは異なり、「眺める主体としての西欧」と「眺められる客体としての非西欧」という従来の構図がその根底で崩れてしまっているからである。言いかえれば、そこに本来いるべきはずの「他者」がきわめて曖昧になってしまっているからである。この点に関して西成彦は以下のように述べている。

無国籍化していく西洋人の文学—コンラッドの文学をひとことで定義するとそういうことになる。(略) 洋上まで含めて地球上のありとあらゆる場所が、無国籍者たちの遭遇と別離と伝説化の場と化し、たがいがたがいを映しあう光景。コンラッドの文学的関心は、植民地を舞台にしながらも、いわゆる異人を映し出す意欲を欠き、ひたすら同類(略)を追いかけることに注がれた。⁽²³⁾

西に倣って言えば、「異人を映し出す意欲を欠いた物語だからこそ、多くの読者は『闇の奥』を「彼の内なる闇、内なる異郷への旅であり、認識への旅」⁽²⁴⁾ と考えることで、このきわめて「危険な」物語を曖昧にやり過ごそうとしたのである。しかし『闇の奥』は「アフリカ」のことを語っているのでも、「内なる闇の探求」を寓話化したものでもない。この物語はまさに「帰還する存在」と「帰還せざる存在」の重層的な絡み合いの話なのである。ここでは、いわば二つの異なる旅が互いに絡み合い纏れ合いしながら互いに互いを照らし合っているのである。クルツがマーロウであって、マーロウがクルツであるような世界、それは同時に西欧人の婚約者がアフリカ原住民の女へと入れ替わることも可能な世界でもある。事実、『闇の奥』の末尾で、マーロウはクルツの婚約者を前にして以下のような考えに陥るのだ。

僕はこの女の悲劇的でよく知っている「亡霊」をも見続けることであろう。しかもこのときの彼女の動作に、僕はふとあのもうひとりの悲劇的な女、身体中に効能のない護符を飾り、あの地獄の流れ、暗闇の流れの夕映えの輝きにあらわな薫色の腕を差し伸べていたあの女に、何か似たものを感じ取った

ように思う。(75頁)

(…) I shall see her too, a tragic and familiar Shade resembling in this gesture another one, tragic also and bedecked with powerless charms, stretching bare brown arms over the glitter of the infernal stream, the stream of darkness.

「ひとりの女」が「もうひとりの女」であって、「もうひとりの女」が「ひとりの女」であるような世界、言いかえれば、白い肌がまさに黒い肌と重なり合うような世界、これこそが『闇の奥』そのものなのである。

注

- (1) H.G. Wells, *The Time Machine*, in *Seven Science Fiction Novels of H.G. Wells*, Dover Publications, 1934. この作品からの引用はすべてこの版による。その頁数のみを本文中に記す。日本語にするにあたって、橋本楨矩訳(岩波文庫、1998年)を参考にしたが、必ずしもそれに従っているわけではない。
- (2) Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, Penguin Books, 1967. この作品からの引用はすべてこの版による。その頁数のみを本文中に記す。日本語にするにあたって、中野好夫訳(新潮文庫、1951年)を利用した。
- (3) フウイヌムとヤフーの対立に関しては、四方田犬彦『空想旅行の修辞学—「ガリヴァー旅行記」論』(七月堂、1996年)の第8章(337-401頁)に詳しい記述がある。
- (4) 四方田犬彦、386-387頁。
- (5) Daniel Defoe, *Robinson Crusoe (second edition)*, Ed. Michael Shinagel, W. W. Norton, Norton Critical Edition, 1994. この作品からの引用はすべてこの版による。その頁数のみを本文中に記す。日本語にするにあたって、吉田健一訳(新潮文庫、1951年)を参考にしたが、必ずしもそれに従っているわけではない。
- (6) この一節は岩波文庫『ロビンソン・クルーソー』(上巻)(1993年)の表紙に記されている一節である。
- (7) 田所光男は、その論文「〈良き野蛮人〉論の強みと弱み」において、アラン・フィンケルクロート(Alain Finkielkraut)を援用しながら「〈良き野蛮人〉のテーマとは結局のところ、植民地化とは別なやり方でヨーロッパが非ヨーロッパ世界を利用しているのにすぎないのだ」と述べている。(佐々木英昭編集『異文化の視線』所収論文、名古屋大学出版会、1996年、211頁)
- (8) Joseph Conrad, *Heart of Darkness (third edition)*, Ed. Robert Kimbrough, W. W. Norton, Norton Critical Edition, 1988. この作品からの引用はすべて

てこの版による。その頁数のみを本文中に記す。日本語にするにあたって、中野好夫訳（岩波文庫、1958年）を参考にした。"Kurtz"の読みも慣例に従ってカーツではなくクルツとした。

- (9) スタンリーとリヴィングストーンとの出会いに関しては以下の書籍を参照した。丹治愛『神を殺した男—ダーウィン革命と世紀末』（講談社、[講談社選書メチエ14]、1994年、234—236頁）
- (10) クルツは「出張所というものはすべて将来の発展のためにいわば街道の灯台のようなものにならなくちゃいけない。商売の中心と言うだけじゃなく、進んで文明、進歩、教化の中心にならなくちゃいけない」（34頁）と主張していた。
- (11) 人の話によれば、「クルツ当人も、もう出張所の商品がすっかり空っぽになった以上、明らかに一緒に帰って来るつもりだったらしいが、300マイルも下った所で、急にまた引き返すと言い出し、そのまま、彼は自分ひとり、小さな四人漕ぎの丸木舟で帰って行ってしまった」（34頁）とのこと。これを聞いたマーロウは以下のように言う。

僕としても初めてクルツを見たような気がした。鮮やかな映像だった。丸木舟、4人の原住民の漕ぎ手、そして突如として本部に背き、交代になることを拒み、そしておそらくは家郷の思い出にさえ背を向けて、あの荒野の奥地、荒涼たる無人の出張所に向かって進んで行く一人の孤独な白人の姿。動機は僕にも分からなかった。（同頁）

- (12) 西成彦は正当にもその著書『森のゲリラ 宮沢賢治』（岩波書店、1997年、136頁）の中で「外部から訪れるものに決定的に変質を加え、生きて返すにしても、ゾンビのようにしてしか生き残ることを許さない極限的な場としての「闇の奥」。その「闇の奥」で何があったかを、ゾンビたちは堅く口をつぐんで、もう語ろうともしない。「闇の奥」の何であったかを語らせるために、ゾンビをめぐる風聞のすべてに耳を傾けるもうひとり、ゾンビの謔言をさえ真摯に受け止めようとする「耳の人」が必要となったのである」と述べている。
- (13) この世界に関しては、マーロウの以下の言葉がもっとも適切に表現しているであろう。

彼らは自分自身だけの世界に住んでいるのだが、そのようなものは、これまで一度だってなかったし、これからだってあり得ないものなのだ。それはあまりに美しすぎるのだ。もし彼らがそんな世界を築きあげようとしても、たちまちその日の晩には粉々に砕け散ってしまっているはずだ。（16頁）

この一節での「彼ら（They）」とは、文脈上では、女性を指している。マーロウは、ここで、植民地主義的なプロパガンダに洗脳されている彼の伯母および（クルツの婚約者をも含む）女性一般を非難し、侮蔑しているのである。しかしながら、マーロウ自身、必ずしもこの「美しすぎる世界」（理想主義的世界）を侮蔑しているわけでもないようである。実際、マーロウは、最後にはこの世界へと帰還したことで明らかのように、この世界に対してきわめて曖昧な態度を示している。もちろん、全面的に洗脳されているわけではない。だからと言って、「それはまったくの偽善だ」と至るところで言い触れ回っているわ

けでもない。まさに「Not very clear」(11頁)としか言いようがないのだ。英文学者である中井亜佐子は、『英語青年』(2001年7月号)に発表した論文「クルツ氏は何を意図したか」において、この「美しすぎる世界」とは、帝国崩壊の後も現代に至るまで、「世界中の英文学者たちのいわば善意によって、かろうじて維持されている幻想にすぎない」(214頁)ものだと述べている。

- (14) マーロウは以下のように言う。

だが、僕らがもっとも慄然となるのは、一僕らと同様—彼ら(原住民)もまた人間だということ、そして僕ら自身と、この狂暴で情熱的な叫びとの間には、遙かながらもはっきり血縁があるということを考えてときだった。それが醜いと言えば、そうだ、それはたしかに醜い。だが、君たちにして本当に勇気があるというなら、いやでも承認しなければならぬと思うのは、現に君たちの中に、あのあからさまな狂騒に共鳴するきわめて微かなあるものが確かにあるということだ(略)。

(…) but what thrilled you was just the thought of their humanity—like yours—the thought of your remote kinship with this wild and passionate uproar. Ugly. Yes, it was ugly enough, but if you were man enough you would admit to yourself that there was in you just the faintest trace of a response to the terrible frankness of that noise (…)(37—38頁)

- (15) 丹治愛『神を殺した男—ダーウィン革命と世紀末』(講談社、講談社選書メチエ14、1994年、214—215頁)
- (16) 丹治愛は、『モダニズムの詩学—解体と創造』(みすず書房、1994年)においても、「文明の深層に横たわる原始的な衝動が表層の文明を下から突きあげていまにも破碎してしまうかもしれないという」(212頁)感覚について詳述している。ただし丹治はここではこの感覚を、批評家ライオネル・トリリングの古典的モダニズム論である『現代文学における現代的要素』(1967年)に倣って、世紀末の西欧モダニズムの文脈に応じてきわめて肯定的にとらえている。
- (17) ちなみに、ジークムント・フロイトがその最初の本格的著作とも言うべき『夢判断』を刊行したのは『闇の奥』の翌年にあたる1900年のことである。この中で、フロイトは無意識の構造を中心とする深層心理学の基本的概念を確立するのである。(この項を書くにあたって、今村仁司編『現代思想を読む事典』講談社、講談社現代新書、1988年を参照した。)
- (18) 『シェリタリング・スカイ』を別とすれば、1945年に書かれた短編『遠い挿話』*A Distant Episode*がその代表的なものであろう。この短編に関して、この作品の訳者でもある四方田犬彦は、その巧みな解説の中で以下のように述べている。ここで四方田が述べている観点こそ、まさに、拙論のテーマそのものである。

南モロッコの方言調査を企てた白人の教授が、正体も定かでない現地人に誘われるままに町外れをどこまでも歩かされ、窮地に陥る。(略) 知の探求を志した者がいつしか境界を踏み外して、認識も制御も欠いた非知の領域に及んだときに見えてくる、世界の「外部」の諸相こそがここでは問われているのだ。19世紀後半のライダー・ハガートの冒険家の帰還はもはや許されていない。あまりに遠く

へ行きすぎた者の、帰還の困難と、それを静寂のうちに見守る砂漠だけがここに描かれていることのすべてである。(ポール・ボウルズ(四方田犬彦訳)『優雅な獲物』新潮社、1989年、221頁)

- (19) Paul Bowles, *The Sheltering Sky*, The Ecco Press, 1949, p.14. 日本語にするにあたって、大久保康夫訳(新潮社、新鋭海外文藝叢書、1960年)を参考にした。
- (20) もちろんこれは少々言い過ぎである。ジョン・サザーランドがその興味深い著書『現代小説38の謎』の中で言うように、「コンラッドは(略)物語の中で地名に触れるのを慎重に避けている。物語次元を抽象化させ、国、時間、使われる言語などの細部が無関係であるようにしているのだ。(略)作家コンラッドのコンゴでの行程はそのままこの作品の中に辿ることはできるけれども、コンラッドは場所の名前、仕事の名前、そして一私にわかるかぎりでは一マーロウがその「奥地」に入り込んでいく「闇」の、その大陸の名すら挙げていない」(『現代小説38の謎』[川口喬一訳]みすず書房、1999年、15頁)からである。サザーランドは愉快的エピソードとして、彼の知っている学生のひとりが「ほかの点では十分に知的な学生が、『闇の奥』の川はアマゾン川であると推定したのに出会ったことがある」(同頁)ことを紹介している。コンラッドのこうした曖昧さについては、イギリスをはじめとするヨーロッパ全体の植民地主義ではなく、あくまでもベルギーのそれへの批判がコンラッドの念頭にある以上、その辺をかなり曖昧にせざるを得なかったためであるとサザーランドは主張している。
- (21) 相良英明は、その論文「異郷(エグザイル)の文学—ジョウゼフ・コンラッドにおける破壊的要素としての異郷」において、「マーロウのコンゴ河を溯って、闇の奥へとわけ入って行く旅は、彼の内なる闇、内なる異郷への旅であり、認識への旅となっている。この場合の異郷とは単にカルチャー・ショックを与えるだけのものでも、エキゾチズムを感じさせるだけのものでも、冒険心を満たすだけのものでもない。それは、異郷によって、文明に飾られていない真の自己を発見するためのものである」と述べている。(日本比較文学会編『滅びと異郷の比較文化』所収論文、思文閣出版、1994年、180頁)
- (22) Chinua Achebe, *An Image of Africa : Racism in Conrad's Heart of Darkness*, in Joseph Conrad, *Heart of Darkness (third edition)*, Norton Critical Edition, 1988, pp.251-262.
- (23) 西成彦前掲書、26-27頁。
- (24) 相良前掲論文、180頁。